

月刊

いじろのとも

第五卷

九月号

自分を立てる社会

現代は

ひとを制して

自らを

立てる立身

自立の社会

だがしかし

世界の平和

自らを

制してひとを

立ててこそある

盛夏のたいさんぼく

たいさんぼく

今日も新たな

花をつけ

損得が優先

多くの人は

自分の損得で

善悪を決め

真偽を決め

美醜を決め

そして

仁義を無視する

人生を考え直して

みたい人は 九

『老子』解説(八)

今月も「道」について説いています、第二十五章を取り上げます。これまで道については、二月号(第一章)、五月号(第十四章)、八月号(第二十一章)でも取り上げました。これまでのところに、もう一度お目通し頂ければと思います。

(第二十五章)「物」があり、「混成」していて、天地に先立って存在しています。それは、ひっそりとして音もなく、ぼんやりとして形もなく、独立して何ものにも依存せず、何ものにも変えられず、あまねく行き渡っていて、止まるところがありません。従って、天下の母とすべきものなのですが、私はその名を知りません。でも、仮に呼び名をつければ道と言えますし、強いて名をあげれば、「大」とも言うべきものです。つまり大なるものは行き渡り、行けば遠くまで達し、遠くへ達すればまたもとへ

戻って来るからです。

原文は、この後に少し続きますが、後で書き加えたいので訳を省略しました。

さて、出だしの部分の『「物」があり』の物ですが、これは、先月号の第二十一章で出てきた物と同じ意味です。

これは普通の日本語でいう物質や事物を指すわけではありません。先月号でも述べましたように、私のモデルの他己を表すものなのです。その最高のものは、絶対他者です。それは、神と言っても、仏と言っても、超越と言っても、空と言ってもよいようなものなのです。老子では、道と殆ど同義と考えてもよいと思います。次に、それが『「混成」』していて、天地に先立って存在しています。』という部分ですが、まず、混成していて、という部分に対応する記述が既に、五月号の第十四章にあります。それは、「一つに混ざり合っていて区別がつかないもの、それが道なのです。」という部分です。また、天地に先立って存在しています、という部分に対応した記述も、既に二月号での第一章と五月号での第十四章にあります。それは第一章では『「無(道)」は天地の始めに付ける名』という部分に、また第十四章の「私た

ちは時間的始元としての道を捉え・・・この始元としての道をよく知ることこそが道の根本なのです。」という部分とに見られます。

次の、「それは、ひっそりとして音もなく、ぼんやりとして形もなく」という部分ですが、これも、五月号での第十四章の次の記述に対応しています。つまり、「道は・・・聞こうとしても聞こえませんので、音がないと言え、手で触れようとしても触れられませんので、形がないと言えます。」という部分です。

このように、ここまでは既に紹介しました、道についての三つの章にも同様の記述がありました。その要旨は、物つまり道は、あらゆる存在に先立って、混ざり合って一つに成って存在していて、それは認知・言語(あたま)機能や感覚・運動(からだ)機能では捉えられないものである、ということですが、でも、「あたま」と「からだ」と「こころ」を統合して、ヨーガ(瞑想)をするとき、自分の直観やイメージの中に、実感として捉えることができるものなのです。

次に、進みます。「独立していて何ものにも依存せず、何ものにも変えられず、あまねく行き渡っていて、止まるところがありません。」という部分です。

これは道が絶対で無限で永遠であり、相対で有限で時

間的である、この世のあらゆる存在の根源と成っていることを言っています。この事も既に、何度も言ってきたことだと思えます。ですから、次に出てきますように「天下の母とすべきもの」と言えるわけです。なのに、それをこの世の言葉で表すことは、出来ないのです。絶対なものに相対な言葉で表すわけですから、もともと矛盾だと言えます。ただ仮に、そう呼んでみるだけのものです。それを老子は、「道」と呼んでいるのです。出来るだけ皆に理解できそうな名前を付けてみれば「大」とでも言えるものなのです。そうすれば、多少は分かってもらえるかも知れないというわけです。

それは、私たち人間の力を超えた、私たち人間の力ではどうすることもできないもので、それを「大いなるもの」と呼べば何か、私たちが畏敬の念を持たなければならぬもののような印象を受けることができるからです。私たちに存在を贈っている贈り主ですから、当然そうでなければならぬわけですが。

でも、気を付けなければならないのは、本当はそういうものは、どこにも実在していないのに、どこかに実在するかのようにならぬこと、どこかに実在することです。

それは、この世の言葉で表現した架空のことなのです。ただひたすら、人間が戒律を守り、修行し、精進して、

自分のところの中に実感するだけのものなのです。そして、その実感から得られる当然の帰結として、ところが豊かになり、そのところに基づいて考えたことをこの世の言葉で表現したり、行動として現したりするわけなのです。

でも、言葉で表現したりするのは、ただ多くの人がそういう境地に達してもらえたらいいと思って、方便としてするだけのものなのです。私たちが、そのことに気付けていませんと、言葉で理解したことが、直ちに、そういう境地に達したと同じだ、と誤って思ってしまいますし、「道」のような贈り主がどこか自分の外に存在するように思って、それに執らわれて行き、ますますそういう境地からは、遠ざかって行ってしまふのです。何度も言ってきたと思うのですが、老子の言葉を理解できたと思うことと、現実の生活、現実の人生を充実して、幸せに生きて行くこととは、全く別のことであるということです。これは、老子に限りません。釈尊の言葉でも、キリストの言葉でも、ソクラテスの言葉でも、全く同じです。それを知るだけなら、自分の「あたま」に執らわれの「垢」を一つ増やすだけなのです。それを知ると同時に、それを実行しなければなりません。しかし実行はとても難しいことです。「道」の境地に

達すれば、自然にできることなのですが、そうでなければ、とても難しいことなのです。ですから、その境地を目指して、ひたすら修行していく以外に道はないのです。ここで取り上げています『老子』も、その到達点を示して、修行する動機付けをしていると言えるのです。本当の、最終的な目的は、老子の言葉を正しく解釈することではなくて、その境地に至る事なのです。そうしますと、老子の言葉が自然に分かってくるのです。

多くの、学者と言われる人たちは、その境地に達しないのに、老子を「あたま」で理解しようとしています。そこに間違いの元があります。言葉だけをいじくり回してみても、殆ど得るところはありません。私が何度も指摘していますように、現実に老子を正しく解釈できている者はいません。体験がないのに、体験に基づいたことを理解しようとするわけですから、そうできなくて当然なのです。

最後の、「つまり大いなるものは行き渡り、行けば遠くまで達し、遠くへ達すればまたもとへ戻って来るからです。」という部分に進みます。

大いなるもの、という時連想されるものは、神や仏のような超越の他では、大地とか地球とか宇宙でしょうが、たとえば、地球をとってみますと、大いなるものが行き

渡るとは、地球全体でしょうから、遠くへ行くということとは、地球を一周して元の地点に帰ってくるのだと考えてもよいと思います。

では、別の例として、この地球の進化・発展のことを考えてみますと、ほこりが集まって地球ができ、海の中に生命が誕生し、進化して人間が生まれて来ました。それは、行き渡り、遠くへ達したことを意味します。では、もとへ戻るとは何を意味するのでしょうか。それは、人間が生まれて死ぬように、この地球の死かも知れません。でも、別の解釈もできます。それは人間に至って始めて、この地球を誕生させたものを、知ることができるということです。人間に至って始めて、その起源に帰ることができるということです。それも徹底して自己の起源・根源たる無意識の「生命（煩惱）蔵」と「如来蔵」に降りて行き、両者の統合を自分の中にはかるとき、実現されると考えられるのです。

自作詩短歌等選

口だけ偉い

口だけが
偉いひとが
増えてきて
この世ますます
不信が増える

犬はまねる

犬でさえ
親のすること
まねるのに
なぜに人間
手本示せぬ

思慮ある人よ

世の中の
思慮ある人よ
奮い立て
務め励めよ
克己せよ
自制によりて
激流も
おし流すこと
なき鳥つくれ

蝉しぐれ

犬連れて
早朝散歩
蝉しぐれ

投射

ある男が
あなたは
世間から
ずれている
と言う
自分こそ
世間から
どれほど
外れているか
気付かずに
ひとつのこと
言うとき自分
振り返れ

月々に

月々に
月に満ちかけ
ある如く
ひとつのところに
満ち欠けの見ゆ
もう何万年も
もう既に
何万年も
生きてきた
そんな気がする
この頃の
われ

二つの人種

世間には
二つのタイプの
人種がいる
犬のように
世間に
いつも
しっぽを振っている
ひと
猫のように
利己的に
孤立して
ひとを無視している
ひと

気が抜けたら

気の抜けた
ビールは
苦いだけ
気の抜けた
サイダーは
甘いだけ
味の抜けた
子育ては
辛いだけ
味の抜けた
人間は
味がない

自作随筆選

ある医師の言葉

先日ある医師が印象深く語った言葉に、「人間の命は地球よりも重い」というのと、「共に生きるために 生きるとは分かち合うこと弱き者と」というのがありました。しかし、私は、これらの言葉を聞いていて、その医師とは少し違った感想をもちました。それを述べてみたいと思います。

先ず前者の言葉ですが、確かに、人の命は重いと思います。でも、この言葉を医師から聞きますと、その裏には、現代医療の「何が何でも命を伸ばそう」とする傾向の思想的な起源と、「その重い命を救うのは俺たちだ」という医師の傲慢さの根拠を見るようで、問題性を感じてしまいました。

人間は生まれたら必ず死にます。その死は必然です。なのに、その死を避けることに固執しますと、人間は却って不幸になって行きます。人間には命を永らえること以上に重要なものがあるのです。それは「人間的に生き

ること」です。人間的に生きるためには、命への執らわれを捨てなければなりません。

では、人間的に生きるとはどういうことなのでしょう。一つは自分が修行・精進して自分自身のこころを自由に制御できるようになることです。もう一つは、他者の苦しみや喜びを思つて、人の道に従つて生きることです。他者にも、自分を自由に制御して絶対な幸せに達せられるように、手助けをしてあげることです。

弘法大師さんは、病気がちになられるや、もう生きていても皆に迷惑をかけるだけだから、と言われて一カ月間食物を摂ることを断たれ、後に一週間水も断たれて、自ら死に至られました。これは自殺と同じですが、しかしこれが実行できるためには、命への執着を捨てていること、自分の欲望に打ち克つことができること、の二つができなければなりません。それはまさしく宗教家や幸せを願う人が至らなければならない境地です。命の重さよりも人間的に生きることの方が大切な一つの実例と言えるのです。また、ソクラテスは「自らの無知」に気付かせるために、多くの人と議論をしました。そのせいか、訴えられ死刑の判決をうけてしまいます。その裁判の様子は弟子プラトンの『ソクラテスの弁明』に感動的に描かれています。死刑の判決をうけるや、一月の間、

牢獄につながれたのち、毒杯を仰ぐという死刑執行方法で処刑されました。裁判でも妥協して死刑を逃れる手ではあつたようですし、脱獄も容易にできたようですが、ソクラテスはそれをいさぎよしとせませんでした。どこまでも自分の信念に従って、正しさを主張し、死刑になりました。また脱獄は自分の従つた法を犯すことで、自分の命に執着した非人間的な行動と考えたのです。このように、ソクラテスも、命よりも人間的に生きることを大切にしています。

次の言葉の「共に生きるために 生きるとは分かち合うこと弱き者と」を見てみましょう。私も、この言葉はとてもいい、と思うのですが、少しだけ気になるのは「分かち合うこと弱き者と」という部分です。この言葉をはいた人には、自分が強者であるという思いがあるようで、それが気になるのです。自分も弱者であるという意識が無いとき、こうした言葉は驕慢になつてしまふのです。

人間は、誰よりも誰が強いか弱いかといったお互いの相对比较をしますと、決して幸せは来ません。私も弱い人間なので、分かち合いをさせて頂くことで、私の弱さが、いや私たち人間全体の弱さが、克服されていく。だからさせて頂くことが有り難い。人間はそう考えると

ころにだけ幸せが訪れてくるのです。私はこれまで「一杯の飯を強い人が奪つて、一人で食べるのではなく、たとえ皆で食べれば皆飢え死んでしまふかもしれないけれども、皆で分けて食べることが、かえって人類が生き延びる道であり、皆が幸せになる道だ」と言つてきました。自分が強いからではなくて、自分も弱いから、助けさせて頂いて有り難いと思つてあらゆるボランティア活動や援助行動をしなければならぬと思うのです。人間は強者になればなるほど、弱者になつていっているのです。

釈尊のことば（二七）

法句經解説

（一〇三）戦場において百万人に勝つとしても、唯だ一つの自己に克つ者こそ、実に最上の勝利者である。

この偈の文章そのものには、難しいところはないと思います。敵に勝つより己に克つほうが難しく、また、人生の真の勝利者は己に克つ者であるということだけです。

しかし、この言葉ほど人生で重みをもつ言葉もないように思えます。

私は、人間は「より善い人生を目指す」から人間である、と言っています。その中で特に大切なことは、自分を制してひとを立てる「仁」の価値を実現することです。これは孔子が自己の教えの中心にすえた価値です。しかし、それを実現するためには、道元禅師も言われましたように、自己を磨かなければなりません。毎日毎日、ひたすら精進して磨いて行かなければならないのです。それを実行するには、己の怠惰な心に打ち克たなければなりません。情眠を戒め、自分の安易に流れる心を引き締め、自分の楽しみでするようなことをできるだけ排除し、ひたすら修行しなければなりません。

在家にあつて、仕事が忙しく、そこまで出来なくても、毎朝起きたら直ぐにヨーガを十五分間することぐらいは、しようと思えばできることです。ご飯を食べて体の健康を保ち、命をつなぐのと同じように、ヨーガをして精神の健康を保ち、人間的に健全な精神的エネルギーを作り出して行くのです。毎日行つた十五分のヨーガがどれほどの効果を持つかは、三年なり五年なり、毎日続けてみれば分かります。でもそれを毎日続けるには、己の怠惰な心に打ち克たなければなりません。どんなに

ヨーガがよいかを説き、そうだと自分で納得しても、それを続ける克己心がなければ、それは絵に書いた餅に過ぎません。

その人にとって、宿業として与えられた人生が、そこから脱して本当に有意義で、幸せなものになるかどうかは、このヨーガを続けることができる克己心に恵まれるかどうかにかかわっていると云つても過言ではありません。人は環境に流されます。環境に流されないで、自分が決めた人間的に価値の高い目標をどこまでも遂行して行く自分を、その支えとなる教えと共に得ることは、人生の勝利者となるのに、どれほど価値があることが、この偈にある通りなのです。

(一〇四、一〇五) 自己にうち克つことは他の人々に勝つことよりもすぐれている。つねに行いをつつしみ、自己をととのえている人、このような人の克ち得た勝利を敗北に転ずることは、神も、ガンダルヴァ(天の伎楽神)も、悪魔も、梵天もなすことができない。

出だしの二行は、前の(一〇三)と同じことを繰り返しているに過ぎません。

次の「つねに行いをつつしむ、自己をととのえている人」は、己に克っている人の具体的な内容です。「行いをつつしむ」とは、戒律を守って身を清らかに保つていくことです。また、次の「自己をととのえている」とは、ヨーガのような修行をしていることをいっています。自己に打ち克ち、人生の勝利を修めるためには、この二つは欠かせないものなのです。

たとえば、いくらヨーガをしていても、戒律を常に破っているようでは、自己に打ち克つことにはなりませんし、打ち克てるようにもなりません。

たとえば、戒律として釈尊は在家も守るべきものとして五戒を示されました。それは、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒です。最後の不飲酒は現代では守りにくいと思います。私は、酔うほど飲んではならない、あるいはもう少し弱めて、酒に飲まれてはならない、あるいは、酒だけではなく、麻薬のような薬物を飲んではならない、というぐらいに考えています。でも、アルコール依存とか薬物依存とかに陥っている人には、この戒律はどれにもまして守らなければなりません。少しでも飲めば、どんどん奈落のそこまで落ちてしまふからです。酔わない程度で止めることはできないのです。泥酔するまで飲んでしまわなければ気がすみませ

ん。そうなりますと、多くの場合前の四つの戒律を全部犯してしまうことになってしまいます。

話が少し余談になりますが、アルコール依存症がいま増えているようですので、克服する道について少し述べておきます。

アルコール依存症になった人たちは、自分自身が大変苦しんでいるだけではなくて、周囲の人をも苦しめています。救われるためには、周囲の人たちも変わらなければなりません。本人の自覚が特に大切です。まず、人間として、アルコール依存になったという、自分の背負った宿業を、贈り主から贈られたありがたいものとして感謝する気持ちをもつことが大切です。いま解説している偈にありますように、人間は自分に打ち克つことが、人生の勝利を修めることなのです。まさしくアルコール依存に打ち克つことそのことが、人生の目標として設定されていると言えるのです。ですから、それは目標を頂いて、人間として、有り難いことだと言わねばならないのです。多くの人は、それほど深刻に目標を突きつけられていないだけなのです。私は、今の断酒会の行き方には疑問をもっています。それは、自分の欲望を自由にコントロールできるようになることを目指すというよりも、お互いに励まし合って我慢することだけを教えて

いるように思えるからです。そういう過程を経ることは勿論大切ですが、そこを通り越して、してはいけないことはしたくなくならないという境地までを指さなければ、アルコール依存症になったことが、一生我慢を強いられ、いつでもスリップして元の木阿弥になる可能性を秘めた、憂うべき不幸なことにしかならないように思えるのです。

多くの人にとってこのアルコール依存症の人の話は、人ごとのようなですが、そうではありません。たばこがやめられない人にも、牛肉のように健康にはよくないと思ってもつい食べてしまったり、野菜のように健康にはよいと思っても食べられない人にも、朝の目覚めとともにすっきり起きあがれない人にも、ついつい夜更かししてしまう人にも、ヨーガをやるうと思うのに続けられない人にも、なにか目標をきめてもすぐじけてしまう人にも、関係していることなのです。アルコール依存症の人は、ただ危機的に突きつけられているだけなのです。

偈の、最後の、「このような人の克ち得た勝利を敗北に転ずることは、神も、ガンダルヴァ（天の伎楽神）も、悪魔も、梵天もなすことができない。」という部分ですが、まさしくこの通りなのです。克己が自由にできるような境地に至った人は、自分の心の中に自分の行動の基

準を持っています。そして、それは「法」そのものなのです。従って、それは外界にあるいかなるものによっても、変えることはできないのです。神や梵天（ブラーフマン・バラモン教の宇宙根源神）も変えられないというのは、何かおかしいように思われるかも知れませんが、そうした神や梵天も自分の心が作り出したもので心の統制にしたがっているのです。解脱の境地に至った人は、神のようなものも当然心の中に統合していますから、そうしたものもこの境地を変えることはできないのです。

読者とのコミュニケーション

短歌

妹の ひしたるまなこ 見守りつ

揺れる船体の タラップのぼる

船首（さき）は 海の壁空の壁 引き裂きて

波くろぐるし 玄界灘 越ゆ

朝まだき 海に溢るる 樹々を見ぬ

この小さき島も 日本ならむ

大連よりの引き揚げ

（千葉県・中西美江）

声

『こころのとも』をいつも心待ちにしています。後記、詩、歌、俳句など一番に読みます。教えられるところがあります。でも、『老子』は難しくて、よく分かりません。

(一読者) 俳句

国体のすだち顔出す土産籠

一軒屋へ伸びる電線いわし雲

根釣場のホットコーヒー紙コップ

(徳島県・須藤一樹)

お便り

健康のもと(七) タンニンが現すコク風味は七月号で述べた酒類の優劣に限らない。日頃の主食、副食、調味料や果物にも健康に役立つ序列がある。

この数値が大きいほど健康維持の蔭の力として役立つている。米よりは麦、白味噌よりは赤味噌、白砂糖よりは黒砂糖。その他真剣に次の表を見て頂きたい。数値が大きいほど多用する価値が大きい。特に不良体質を向上させる為には漢方薬を飲むのと同様の効果がある。

次号では、野菜の分析表について説明する。

後記

一、猛暑が続いています。観測史上にない記録的な暑さのようです。世界のそこで記録的暑さになっていきます。何故なのか科学的には分からないようです。地球が温暖化していることは間違いありませんが、その一つの現れなのかどうかも分かっていません。人間に小賢しくできることは、極めて限られたことです。二、多くの人がそうであるように、いくら自然保護を言ってみても空しく、自分は、大きな車に乗り、家も車も事務所もエアコンをがんがん効かして、涼しく過ごし、おいしい養殖高級魚や家畜の肉類をたらふく食べ、多くなった外食でアッシヨンに凝って、まだ着られるのを惜しげもなく捨て、家もまだ使えるのに倒して、贅沢なものに建て替えています。もし、自然保護や世界の貧しい人々のことを真剣に考えれば、こうした贅沢をやめ、一人ひとりの人が、自分で質素節約を心掛けなければなりません。世界の発展途上国の貧困を尻目に、日本を筆頭として発展国がこうした贅沢を謳歌しているのは、何かが異常なのではないでしょうか。この地球の温暖化も発展国のこうした贅沢が、起因しているのではないかと思うのです。

三、七月二十日付けで、待望の「ひとで悩みたくない人

「は」が大東出版社のご尽力で出版できました。消費税込みで二千円です。出来るだけ多くの方に読んで頂いて、出来るだけ多くの方に幸せになって頂けたらと思います。

<p>月刊 こころのとも 第五卷 九月号 (通巻 五十八号)</p>	<p>平成六年九月八日 (発行人) 中塚 善成<small>ぜんじょう</small> (制作) ユニオンプレス (発行所) ひびきのさと エコーコミュニケーション研究所 〒771 43 徳島県勝浦郡勝浦町星谷 星の岩屋</p>
<p>本誌希望の方は、送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610838660</p>	